

ビバハウス便り No. 119 坪内主任指導員の咽頭癌発病で試されるビバの底力～緊急事態に備え、自主研修に出た高崎指導員が急遽ビバに復帰！！

2017年6月5日 青少年自立支援センター 責任者 安達 俊子

連日続く雨がようやく止み、晴れ間が続いて草木が青々と茂っているのを見て初夏の近づきを感じている。今年もビバのメンバーが毎年参加している余市祭（6月9, 10, 11日開催）に向けて、路肩に生えている雑草を刈らなければならないと夏の始まりと共に見事に成長してくれた草をメンバーが一生懸命刈っている。これまでの『ビバハウス便り』でもお知らせしてきたように、頼りにしてきた高崎指導員が、将来のビバハウス後継者として必要な研修をさらに積みたいという事で、やむなくビバを出たので、たまたま広島から北星余市校に関心を持って余市に来た滋賀大学卒の桑田恵輔青年に臨時緊急の指導員を勤めて頂いていたが、この春になって突然坪内主任指導員に癌の疑いが出た。

かなり長期の診断を要したが、最終的に咽頭に癌が発見され、5月8日入院、最低50日間の入院治療が必要との診断が下った。治療の経過によってはさらに長期の治療も必要とのことで、緊急にビバハウスより、高崎指導員にビバに帰れないかとの要請をし、緊急事態として理解をして頂き、当面週3日ないし4日の形で勤務していただき、急場を乗り切っている。

今年三年目を迎えたビバ農業実践塾も大変な困難を押してではあったが、現在のところ何とか順調に進んでいて、去年、一昨年よりもさらに良くなったビニールハウス中の土に、去年もお世話になった町内内田農園のミニトマトの苗を50株、インゲン20株を、メンバー全員でモンガク農場に植えた。水もきちんとやり順調に根付いているようだ。秋には去年よりもおいしいミニトマトができると期待している。

農業の進み具合も順調で少しビバの生活も軌道に乗ってきたので、毎年恒例のイベントも開催できた。ビバハウスでは毎年5月の子供の日に合わせて日ごろ頑張っているメンバーをねぎらうためにイベントを開催している。今年は桑田指導員の尽力もあり一泊二日での日高方面旅行を敢行した。この旅行の目的は三つあり、観光も兼ねて、桜の長い通りで有名な静内の「二十間道路」で花見を、ビバハウス創設期にビバのことが「しんぶん赤旗日曜版」に載ったのを見て、それ以後継続的にすでに15年以上も毎回60キロもの自家米を毎年何回も送ってくださる日高山脈のふもとに近い農家の吉田永昌さんにお礼をすること、もうひとつは浦河にある社会福祉法人「べてるの家」という精神しょうがいを抱えた人たちが町のために何かできることはないか？と考え、自分たちで商売をして生計を立てるといふ福祉施設に見学に行くことだった。

ビバにも精神障害を抱える人がいて、見学をしてみたいという希望から今回どのようなものなのだろうとスタッフ3名メンバー5名の計8名で見学をしてきた。

まずスタッフの方から「べてるの家」とはどんなところか説明を受け、その後浦河町内でべてるが運営している施設を案内してもらい、最後に SST・当事者研究話し合いに参加させてもらうという内容だった。

中でも一番感心させられたのは話の中で出た「苦勞をとりもどす」という言葉。今までの苦勞をとりもどすことによってまた一つ成長することができるというとても大事な言葉を聞くことができた。ビバのメンバーも感銘を受け自分の事としっかり受け止めたようだ。

一泊二日の旅行の中で、日高にある青少年自然の家という施設で宿泊した。そこに泊まった夜は、みんなの仲をより深めようと、息抜きもかねて、全員でいす取りゲームなどのレクリエーションをして、楽しむことに。じゃんけんをしてカードをゲットしていく遊びなど、計4つのゲームをして遊んだ。ムカデ競争や、お玉にボールを乗せて走るリレーはチーム戦だったので、チームで作戦を考え、協力しながら、競い合った。いす取りゲームでは、なんと最年長の私が優勝してしまったりして、みんな驚きと悔しさで目を丸くして優勝を称えてくれた。一見子どもだけが楽しめるような遊びに思えても、大の大人が一つの目標に向かって、体を動かして汗を流し、本気になって取り組むことで、自然とみんなが協力し合い、コミュニケーションが苦手な若者も、進んで仲間とコミュニケーションを取り合ったりして、終始笑いの絶えない楽しい時間を共有することができた。

二日間で三つの目的を果たそうと行った今回のたびは、運転の任務に当たってくれたスタッフの方々にとっても、イベントに参加したメンバーにとってもハードな事でしたが、参加者全員の努力・協力で事故なく、体調を崩す人もなく、当初の目的を果たし、全員にとって一生忘れられないたくさんの思い出を残す事ができた旅となった。